

シンポジウム「私の卒業研究を振り返って～大学で学ぶということ～」

1, 卒業論文題名

『「不登校」の支援～孤立する家族に焦点を当てて～』

2, テーマ選択の動機、理由

- ・自分にとってのキーワード（児童、教育、etc）に沿って考えた結果

3, 卒論で主張したかったこと

- ・内容としては「ネットワーク」（地域協働）の必要性について
- ・本当は多種多様な発達の過程があるということ

4, 卒論作成の過程で苦労したこと

- ・テーマの絞り込みに苦労したこと
- ・文献があまりにも少なかったこと

5, 卒論を書き上げての感想

- ・もっと早く取り組めばよかった
- ・もっといいものが書けたはず

6, 大学4年間の学びを振り返って

- ・もっと色々な人と意見交流がしたかった
- ・大学の学びとは広く、浅くといった感じ
- ・大学の学びは4年間では足りない

7, 最後に

小西 男

僕は勉強の話は面倒くさいので早く流します。卒業論文は「不登校」の支援——孤立する家族に焦点を当てて」ということで不登校について書いた論文です。テーマの選択とか動機、理由は自分にとっていくつかキーワードがありまして、子ども、教育、あとは発達とに沿って考えた結果、最終的に「不登校の支援——孤立する家族」というところに決まっていきました。

卒論で主張したかったことは、卒論で結果的に主張したかったことはネットワーク、地域共同。僕は地域福祉を勉強していましたので、ネットワークの必要性和重要性です。慷慨にも書いていますが、不登校と聴いたら、登校するのがあたりまえだから、不登校状態はだめなんだという世間の風潮があるんですが、僕はここで不登校という状態が本当は発達に対して、いい影響を与えていることもあるということがあって、多種多様な発達のあり方を主張したかったわけです。ちょっとこれは主張できずに、最後に雑感として書かせていただきました。

卒論作成の過程で苦労したこと。テーマの絞り込みに苦労しました。「不登校の支援——孤立する家族に焦点を当てて」と決まるまで、決まったのが11月中旬で、それまでずっとテーマの絞り込みをしていまして、いろんな本を読んで、何にしようかと、全然浮かべんと。最初は実習で児童相談所に行ったんで、児童相談所のあり方とか、政令指定都市系でやっていたんだけど、全然うまくまとまらなくて、自分の中で。結局、最終的に読んでいった中で、自分が興味がある不登校、教育との絡みを考えて、不登校にだんだん絞っていで、11月に決まったということがあります。

文献が、あまりに少なかったというか、僕の場合。単純に不登校だけの問題に関しては結構、文献はあるんですが、僕が焦点を当てようと思った「孤立している家族」、教育機関とかの支援を受けられない家族、支援に乗っていない、フリースクールとかに気づいていない家族に焦点を当ててやったので「孤立している」というのは、そもそも見えてないことなので、文献があるわけがなくて、文献が、あまりにも少なくて非常に苦労しました。スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーというのは、あまり最近過ぎて、文献がないという、まだまだ発展途上のところもあるので、そういうところに苦労しました。

卒業論文を書き上げての感想。もっと早く取り組めばよかったなど。実際、自分のテーマに絞り込みに苦労したのも、一つは全然やらなかったこともあって、10月くらいになって、さすがにヤバイかなと思って頑張ったので、ちょっと遅かったなど。始めてから、ゆったりやっていたので本気になったのは12月になってからなので、実質、卒論を1週間くらいで書いたようなもので、ほんと先生にも自分に対しても申し訳ない気分です。もっといいものが書けたのではないかななど。自分であとから読み返してみても、適当だななど。あまりにも適当に文献を引っ張ってきて、つなぎ合わせて自分の主張を、ちょこちょこ入れて、継ぎ接ぎでできた感じで、もっといいものが書けたんじゃないかなという思いがあります。

大学4年間の学びを振り返って。最初からずっと思っているんですが、もっといろんな人と意見交流がしたかったなど。福祉学科は小クラスの授業でクラスの人とは話ができるんですが、勉強の話とか。もっといろんな人、福祉学科だけではくなく、他学部、他学科の人、他の大学の人、大学ではなく、社会人の人とか、もっといろんな人と意見交流したかった。僕はサークルで、それをある程度、できたので、よかったのかなと思います。

大学の学びは僕の中では広く浅くやるというイメージで、同志社のような総合大学はいろんな学部、学科をとって勉強していく、僕は結構、いろんなことをとっていまして、文学部、社会学部はあたりまえ、商学部、経済学部、法学部、政策学部、工学部もとりました。適当に授業にもぐりこんで広く浅く勉強していったんで

すが、それが人生で最終的に生きてくればいいなと思っています。大学の学びは広く浅くやるので4年間では足りないんです。福祉を生部だけでは4年間では足りるわけではないんですね。福祉は広くて、意外と。やりだしたら止まらないというか、4年間では足りなくて、卒論自体も1年間では足りない、本気に書こうとしたら4年間くらいかけてやってもいいかなと思いました。

最後に一言、いおうかなと思って。なにか大学だけではなく、自分の人生において何か一つ一生懸命になれることを見つけてほしいなという思いを、僕が、すべてに対して適当にやって、卒論も適当にやっちゃったんで、大学4年間の学びも、何もかもが中途半端で、自分が空虚なものに感じて、一つ何か一生懸命になれることを見つめて、それで一番を目指して一生懸命になってほしいなと思います。以上です。

「不登校」の支援

～孤立する家族に焦点を当てて～

19062038

小西 男

<キーワード> 「不登校」「孤立」「ネットワーク」

<梗概>

近年の日本における不登校児童の総数は 2001 年をピークに増減をしつつも減少傾向にある。しかし、一方で不登校の問題は多様化・複合化してきている。また、多様化・複合化している不登校は従来考えられていた不登校とは違い、支援を学校だけに任せることはできなくなっている。そのような状況の中、文部科学省は「スクールカウンセラー活用事業」と「スクールソーシャルワーカー活用事業」を開始した。両職種ともに学校において問題を抱える児童の支援を目的としており、不登校の問題にも取り組むことが期待される。

また、学校は行かなければならないという学校至上主義が存在し、児童が人格的に発達するうえでの選択の自由を喪失させている。そのため、不登校児童を抱える家庭は問題の根本を見誤り、問題を内に抱え込み、孤立している。孤立する家庭を適切な支援に繋ぐためには不登校の問題に対するネットワークを構築する必要があるだろう。このネットワークは児童の人格的発達および学習機会の保障にも繋がるものであり、継続的に支援をしていく必要がある。

<目次>

序章 研究背景と目的

第1節 研究背景

第2節 研究目的

第1章 不登校とは

第1節 不登校の現状

第2節 「孤立型不登校」とは

第2章 孤立型不登校の実態

第1節 家族との関係性

第2節 学校との関係性

第3節 地域との関係性

第3章 不登校支援の取り組み

第1節 行政の取り組み

第2節 学校の取り組み

第3節 当事者組織の取り組み

第4節 フリースクールの取り組み

第4章 今後の不登校の在り方とその支援

第1節 不登校の問題とは

第2節 個別的な支援

第3節 全体的な支援

終章 研究の成果と限界

第1節 研究の成果

第2節 研究の限界